

滋賀の文化情報誌
デュエット

Duet

2015 秋 vol.117

特集

観峰館 開館20周年 新館オープン！

新撰 淡海木間撰 61 ^{いのち}^{しるし}「生命の徴—滋賀と「アール・ブリュット」」について

INFORMATION STATION 催し案内 2015 秋

MYBOOK 自費出版物の紹介

SUNRISE BOOK PRESS サンライズ出版の新刊案内



特集

観峰館 開館20周年 新館オープン！

書文化発祥の地、中国の建築をイメージした左の建物に原田観峰記念室が新設された。右は6階建ての本館。



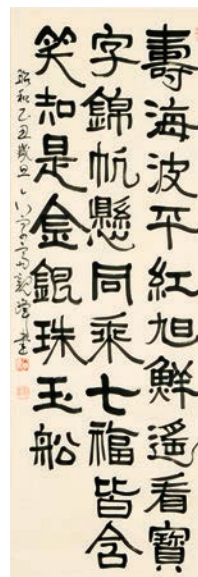
東近江市（旧五箇荘町）にある“書の文化にふれる博物館”
観峰館が、今年10月で開館20周年を迎え、展示施設の充実
のために建設された新館もオープンします。

公益財団法人日本習字教育財団（本部：福岡県）の創作者で、
観峰館の創作者でもある原田観峰氏のコレクションを公開
する博物館が、“近江商人の町” 五箇荘の地に誕生した経緯、
新館オープン記念企画展の見どころなどをお聞きました。

■観峰館

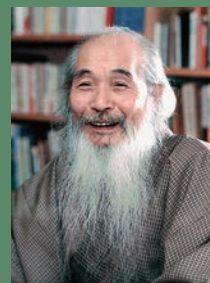
住 所	東近江市五箇荘竜田町136
連 絡 先	TEL 0748 (48) 4141 FAX 0748 (48) 5475
観 覧 料	一般500円、高校生・学生300円、中学生以下無料 特別企画展開催時は、 一般1000円、高校生・学生800円

アクセス JR 琵琶湖線「能登川駅」から近江バス「八日市駅」行きで金堂竜田口下車徒歩
約15分、または近江鉄道「五箇荘駅」から徒歩10分（「能登川駅」からタクシー
利用の場合は約10分）／名神高速道路「彦根IC」または「竜王IC」から約16km



← 原田観峰作品

日本習字創立者
原田観峰（1911～1995）



本名：孝太郎。福岡県生まれ。昭和
28年、「正しい美しい愛の習字」を
提唱して、習字の通信教育事業を
興し、全国規模で書道教育を展開。
30年の歳月をかけて収集した書道
資料などを展示公開する博物館（観
峰館）が、平成7年（1995）に開館。

書はさまざまな筆法を見ることが大切です。

「とにかく全部並べなさい」というのが、

観峰の方針でした。

観峰館学芸員 古橋慶三さん

戦後間もなく書道の通信教育を開始した観峰

——創立者の原田観峰さんについて、開館に至る経緯をお教えいただければと思います。

原田観峰は福岡県瀬高町（現みやま市）の出身で、生家は酒樽をつくる仕事をしていました。父親が自分の子供だけでなく、雇っている職人にも手習いをさせるぐらい教育熱心な人だったそうで、勉強もでき、習字が得意だった観峰は、小さいころから通信教育みたいなもので、小野鷲堂という有名な書道家のお手本をもとに書を練習し、

当時から大人顔負けの字を書いたそうです。福岡の私立中学を受験する予定でしたが、受験の年に、親戚の一人が先物取引で大損害を出して、家業が傾いてしまいます。受験はあきらめて、博多にいたおばさんの家へ居候して夜間の学校に通いながら、昼間は九州大学で給仕などをしていました。

17歳のときに東京へ出て、日本大学教育学部二部（夜間部）へ入って、昭和の初めには小学校の代用教員に採用されます。他

のアルバイトもしながら、書も学ぼうと、神田の古本屋さんで立ち読みして、見て覚えて、家に帰ってから、記憶でそれを書くという、無茶な勉強をしていたそうです。毎日行くものだから、古本屋の店主が「3日間だけだ。汚すなよ」と貸してくれたこともあったとか。

やがて、戦争が始まり徴兵されると、字が上手だということで、九州にある連隊で賞状などに字を書く事務方となり、戦地へは行かずにすみしました。その頃、上官からあちこちで字を書く機会が多い。軍隊でよく使われる用語の見本を本にまとめたらどうだと言われて、実際作成して連隊内で配ったりしていたらしいです。

終戦となり、郷里の福岡に帰ると、教育面に非常に興味があったので、幼稚園をつくりました。最初は一つだけでしたが、経営の手腕もあったのでしょう。まもなく五つの幼稚園を運営するようになりました。

プロフィール

ふるはし・けいぞう／1961年、大阪府生まれ。ニューヨークで美術品の修復技術を学んで帰国後、1994年より観峰館勤務。

「収蔵品の中でお気に入りには、清の書家、楊岷という人の作品です。非常に特徴的で、個性派です。口の悪い偏屈なおっさんで、賄賂とかが大嫌いだったために職を辞めてしまったという人なんです」

教えたりするうち、もっと広く大人にも字を教えたいというので、昭和28年に通信教育を始めます。ある種のカリスマ性をもった方だったのですね。あるでしうね。

※1 小野鷲堂（1862～1922）書家。静岡県生まれ。書の実用性と芸術性の融合を主張して、鷲堂流と称する独自の平明優美な書風を完成。「斯華会」を創設し、書の普及に努めた。

それと、アイデアマンでもありました。自分が小さいころにやった通信教育をもとにしていますが、戦後の何もないところから書道の通信教育という事業を興したのですから。自分で書く手本も、指導書にあたるものも、自ら鉄筆で書くガリ版刷りの時代です。

近くの小学校で先生や校長先生相手に説明して、実際に目の前で文字を書いてみせる。こっちでもあちらでもとなつて、またたく間に九州各地に広まったそうです。最初は、家族でガリ版を刷って、封筒に入れてとやっていたのが、場所も手ぜまになったので、福岡県の柳川から博多まで出て、名称を西日本習字連盟とし、入会者が何万人という単位に増えていきました。

そして、九州・中国地方に広まった頃には、教材を当時のトラック、ダットサンのボンネット部分が長いトラックに積んで1週間ぐらいかけて、全国行脚したそうです。目的の土地に着いたら、まず夕方、公民館へ行つて、「あしたは公民館を使わせ



↑書を書く原田観峰

てくれ」と頼む。許可が出たら、町へ出てピラを配る。

人が来たら、中国から復員してきて張伯峰^{ちやうはく}という中国名も持っていた人が一緒に رفتっていたので、前口上を中国語でやる。すると、「おお、なんだなんだ」とみんな寄ってくる。そこに、観峰が登場して字を書いたそうです。つまり、僕らの小さいころにはまだありませんでした。紙芝居とか、行商の駄菓子屋さんとかに人が群がる感じだったでしょう。珍しがって子どもが集まってくる、子どもが来たら親も集まってくるみたいな。

訪中使節団への参加をきっかけに美術品を購入

その少し前、書道界の中でも観峰の名前がそこそこ知られるようになっていた頃、おもしろいエピソードがあります。

昭和41年ごろ、毎日新聞社の毎日書道会の訪中使節団が組織され、10人前後の書道家が中国を訪問しました。まだ、中国との国交がない時代です。使節団としてあちこち回る中で、郭沫若^{かくもじやく}という大変有名な政治家で学者でもある人と会って話をする機会がありました。

——その後の田中角栄内閣による日中国交正常化でも重要な役割を果たした人ですね。

中国では、伝統的に字が書ける人同士で集まると、お互いにその場で字を書いてプレゼントするんです。ところが、当時の日本の書家の多くは、あまり人前で字を書きたがらない。その中で一人、観峰は人前で書くことが好きで慣れているので、郭沫若

そうやって各地に支部を設け、昭和46年（1971）には京都へ本部をつくります。

普通、書を学ぶためには有名な書道家の弟子になる必要があります。書道界全体が先生を頂点としたピラミッドになっています。観峰もその中の一画である新聞社主催の公募展に出品し、何度か審査を通っているのですが、誰その弟子といった系譜には入っていません。書道界の上下関係などより、自分の教則本を使って習字教室で一人でも多くの人に上手な字を書いてもらいたいという思いの方が大きかったからだと思います。

の前でも臆せずさらさらと書いた。すると、「君はよく勉強しているね。なかなかいいんじゃないか」みたいな感じで、親しくしてくださいました。

昭和40年代になり通信教育がある程度成功すると、自腹で資料を購入する余裕も生まれました。タイミングよくといってよいのか、当時、中国の方は日本との戦争の後、国共内戦（第2次）があり、毛沢東思想^{もうたくとうしゆ}を徹底させるための思想統制、いわゆる文化大革命が始まりました。そこでは孔子などの儒教も否定されたので、家々にあった古い儒教の言葉が書かれた掛け軸などもすべて供出させて燃やしました。これを、学生たち、いわゆる紅衛兵^{こうゑいへい}にやらせたんですね。これが5、6年続き、多くの価値ある書も失われたわけです。

一方で中国政府はお金に困っていた。そのため、文革で集まった書を貿易港のあった広州に運んで、美術品として外国人に絹織物などとともに売り出していました。そうした中の中国をたまたま観峰は訪問し、郭沫若さんと親しくなり、美術品輸出

のことを知ります。それで、訪中するたびにどんどん買うようになりました。

日本には財閥系のものなどいろいろなコレクションがありますが、ほとんど明治から大正にかけて収集されたものです。それらは鑑定家が代々の所有者なども調べて「本物に間違いはない」というお墨付きをもらってから購入されたものです。残念ながら、広州で売りに出たものは供出品なので、どんなものが山の中に入っているかわからず、偽物も多い。観峰は助言は受けずに、「とにかく買えるものは全部買おう。後で整理したらいいじゃないか」という感じで買っていました。それらが当館の収蔵品の元となっています。

——書に関わるものだけでなく、アフリカのお面などの民俗資料や、欧米のクラシックカー、オルゴールなどもありますね。

来館者の方も驚かれます。奥さんが書が好きで来られて、「主人と子供は、「どうやって時間をつぶそうか」と思っていたら、いろいろあつて楽しめた」とよく言われます。昭和50年代になると、観峰は、東洋だけでなく、もっと広く書の文化を伝えたいと、アメリカやヨーロッパを訪問するようになりました。当館の西洋アンティークは、ほとんどニューヨークで購入したものです。

アフリカやオセアニアの民族資料は、これからの時代、子供たちはもっと世界のことを知らないといけないという教育的な目的のために集めたものです。海外旅行ができる人はまだ少数で、今のようテレビの情報番組で毎日海外のようすを見ることができるような時代ではなかったですから。

——コレクションの整理ができたところで観峰館の開館となったのですか。

観峰館を建てるまでも、京都・長崎・福岡などに何力所か資料館をつくっていま

※2

郭沫若（1892—1978）中国の文学者・歴史学者・政治家。日本に留学中、文筆活動を開始。日中戦争勃発と同時に抗日救国に活躍。中華人民共和国成立後、政務院副総理・中日友好協会名誉会長などを歴任。

す。それらの展示室で公開するうちに、本物と偽物の鑑定をし、整理が進みました。私は当時の整理には加わっていないのですが、一作だけ見て真贋を見極めるとい

研修施設の建設をきっかけに滋賀の地へ

——最終的に滋賀県の五個荘の地に落ち着いたのは、どういった経緯で。

観峰にとっては、昭和50年代が一番充実していたといえます。全国に支部ができて会員が多くなつてくると、実際の書き方を見ながら学ぶために研修会を時々行っていました。そのうち、どこかの施設を借りてではなく、独自の研修施設をつくりたいと考え、自ら候補地を探しまわりました。その中の一つが、滋賀県神崎郡永源寺町蛭谷（現、東近江市蛭谷町）という集落で、観峰はそこをとても気に入って、土地を借りて昭和52年に研修施設「すめら学園」を開設しました（平成12年に閉園）。——愛知川をさかのぼって永源寺ダムの方

——この、本当に山の中ですね。
正直、不便なところなのですが、そこに鉄筋3階建ての建物が3棟、食堂も備えた管理棟、100人ぐらい泊まれる宿泊棟、字を書く教室である研修棟ができました。

※3 北川弥助（1911～2004）東近江市伊野郡町に生まれる。昭和25年、県議会議員選挙で初当選後、連続14期の当選を果たす（当時の全国の県議の在職期間の最長記録）。

※4 塚本さと（1843～1928）東近江市五個荘川並町の近江商人・塚本定右衛門の五女として生まれる。大正8年（1919）、77歳の時、私財を投じて淡海女子実務学校を創設。初代校長となる。

※5 淡海女子専門学校 淡海女子実務学校を前身とし、戦後の学制改革にもない誕生した和裁洋裁を中心に学ぶ淡海高等家政学校から昭和51年（1976）に改称。

れても素人には無理だけれど、たくさんあるので書き手が同じ名前の書をダースと並べると、これは明らかに違う、下手だとだいたい見当がついたそうです（笑）。

短ければ2泊3日ぐらいですが、山から下りずに3週間というような長期研修もあつたそうです。

ただ、本当に山の上なので、最初は水道もありません。なんとかならないかとあちこち頼みに行ったら、北川弥助さんという県会議員が、「わしがなんとかしたろう」と言いつて、水道を引いてくださったんです。偶然ですが、2人は2カ月違いの同い年

だったこともあり、すくなかよくなつて。当時、北川議員は、大正時代に地元の塚本さとさんがつくられた、私立女学校（当時の名称は「淡海女子実務学校」）を理事長として引き継いでおられたのですが、昭和50年代になると時代も変わり、入学者が少なくなっていました。「どないしよう」と観峰に相談したら、「じゃあ、わしがそこを書道の学校にする。由緒ある『淡海』という名前は残しましょう」ということで、昭和60年に淡海書道文化専門学校ができ、



↑淡海書道文化専門学校

観峰館に隣接してある。書道を基礎からトータルに学ぶことができる専門学校で、卒業生の多くが書道教室を開いてる。全国から生徒が集まり、年齢は20歳代を中心に60歳代までと幅広い。古橋学芸員は同校の講師も務めている。

平成6年まで観峰が校長を務め、時々字を教えたりしていました。

老いの自覚もあつたのでしよう、そろそろ自分のコレクションを集めた最終的な博物館をつくりたい。それなら書道学校の隣にということになり、田んぼの地権者さんを訪ね歩いて現在の敷地を確保しました。

来館者の方が「なんでここにあるのですか？」とお尋ねになつても、なかなかいつまんで話しくい経緯なのですが。

——いえ、お聞きして、「なるほど」と納得しました。私は開館して2～3年目に一度来たことがあるのですが、その時は中の展示が雑然としたという失礼ですが、とにかくたくさんさんのモノがある印象でした。

それが観峰の方針というか、書の学習にはさまざまな筆法を見ることが大切で、わしを買ってきた、わしのものだからケースに入れなくてもいい。触って壊れたら、また買えばいいんだから、とにかく全部並べなさい」と言っていたんです。

ですから、最近だと、伝統的な中国絵画に西洋絵画の技法を持ち込んだ清朝後期の画家の作品が、中国の美術市場でとても人気があります。ガラスケースもなしで展示しているこれらの作品を、専門家の方がご覧になって、驚かれるようなこともあつたり（笑）。

そうした展示ばかりでは限界もあるので、今回新館が建設されたわけです。

最初の観峰のコンセプトを受け継いでいるという意味では、書に親しむ、触れていただくための拓本体験なども、申し込みがあれば随時開催しています。最近、滋賀県下の高校の書道部や、大学の書道部やサークルなど、学生の方々が申し込まれることも多いですね。

新館オープン記念 特別企画展について

清朝後期は動乱の時代でありながら、華やかな書が活発に交換されていました。

観峰館学芸員 寺前公基さん

プロフィール

てらまえ・きみもと／1979年、兵庫県生まれ。2009年より観峰館勤務。「専門に研究しているのは、平安時代中期の貴族、藤原道長の日記『御堂関白記』で、書の歴史と作品に関する知識がそれに役立てばと思っています」



新館展示室（上の写真も）。ケース内は実際の特別企画展のものとは一部異なる。

「公開承認施設」の認可を目指した新館

まずは、新館が建設された経緯をお話しいただけますでしょうか。

開館20周年を今年の10月で迎えるというのが一つと、平成24年4月に公益財団法人の認可を受け、博物館として、もともと地域に密着した活動を行おうとする場合、それまでの当館の施設では十分な環境が整えられていませんでした。

そこで、温湿度管理が徹底され、重文なども含めた指定文化財でも、多館から借用する作品でも受け入れることができる収蔵庫と展示室を備えた新館を建設したわけです。将来的には文化庁による「公開承認施設」

皇帝としての教養を示す溥儀の書

——最初の企画展に、「華麗なる清朝後期の書画」をテーマに選ばれた理由は。

当館のコレクションのメインは中国書画で、その中でも多いのは、清朝後期から中華民国の初期のものです。つまり、清朝後期は、コレクションの一番核となる作品が多い時代です。さらにその清朝後期のキーパーソン、誰でも知っている人物といえば、ラストエンペラーの溥儀（ふぎ）でしょう。そこで、日本に数点しかない溥儀の書のうち2点を、それぞれ東京国立博物館と早稲田大学倉津八一記念博物館からお借りして、溥儀を中心に展覧会を組み立てました。

当館コレクションの中には、東博所蔵の溥儀の「楷書七言対聯」と同じような、対聯（掛け軸で対になっているもの）の蠅箋（ろうせん）という非常に華麗な作品が多いので、溥儀

「設」の認可を目指しています。

——外観や内部の特徴はなんですか。

鹿島建設のデザイナーによる設計ですが、開放的なエントランスで、エントランスからすぐに展示室に直結するようになっていきます。これまでだと、広い空間の中に、どこにメインの展示室があるのかわかりにくいという欠点があったので。

また、作品の移動を考え、デッドスペースのないシンプルな造りを基本にしています。これまでは入り組みすぎていたので、逆に平屋建てのシンプルな造りで、いわゆる博物館らしさを出しています。

を中心に、動乱の時代ではあったけれど、華やかな作品が多くつくられていたという文化面での特徴を紹介できればと思います。——紙が赤や青など色とりどりで、一般的な書の展示とは印象が違いますね。

そうですね。この蠅箋という紙は唐の時代から作られていたのですが、特に清朝後期によくつくられ、活発にやりとりされたものなんです。蠅箋は、基本的に贈り物用に使われるので、たいていは右側の部分に誰に送ったかということが書いてあります。じつは、今回の展示品のような大きな蠅箋は作り方の技術が継承されなかったために、いまではつくれないんです。その点でも、清朝後期特有の作品たちだと言えます。書かれている文字は、蘇軾（そしつ）などの有名な詩人の漢詩の一節であることが多いですが、自作の詩を書く場合もあります。

作品には、結婚や引っ越しをお祝する意味を込めたものがあり、きらびやかな蠅箋がお祝いの気持ちを一層引き立たせます。

注文主や贈る相手の趣味で色を選んだのだろう作品も多く、日本人の感覚からすると「えっ？」と思うものなど、本当にいろいろな色使いがあります。

——展示される溥儀の書には何が書かれているのですか。

一つには、杜甫（とほ）の詩が書かれています。「過去を振り返ったら、すごく楽しかったな」という内容の詩なので、ちょっと意味ありげでしょう。

もう一つの東京国立博物館蔵の作品は、完全に自作詩で、おそらく溥儀の名による書を求められて書いたものだと思います。

両者ともとてもしっかりした整った書で、溥儀は『ラストエンペラー』（ベルナルド・ベルトルツチ監督、1987年）という映画などのせいで、奔放な人物というイメージがありますが、皇帝としての嗜み、基礎教養をしっかりと身につけた人だったことがわかります。

中国の科挙という役人の試験でも、尊ばれる字というのは、王羲之（おうぎし）を中心とした、誰が見てもきれいでバランスのとれた字でしたから、その点は溥儀も同じです。

——新館を利用した今後の企画展は、すでに決まっているのですか。

この後の来年2〜3月には富岡鉄斎（とみおかてつさい）の展覧会を予定しています。今回は中国のものがメインでしたから、次は日本の作品ということで、他館からお借りした作品も交えながら展開していきたいと思っています。

将来的には、当館のある東近江市内の貴重な文化財を展示し、市民の方々に気軽にご利用いただける施設になりたいと思っています。

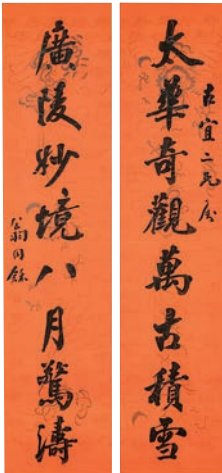
——企画展準備でたいへんお忙しいところ、ありがとうございました。

※6

溥儀（1906〜1967）清朝最後（第12代）の皇帝。宣統帝。辛亥革命で退位し、満州国皇帝となり、康德帝と称した。

華麗なる清朝後期の書画 —ラストエンペラーの時代—

→ 翁同龢（楷書八言対聯）（清時代後期）
翁同龢（1830～1904）は清朝末期の政治家。光緒帝（第11代皇帝）の信任が厚く、西太后派とは対立した書家としても著名。



→ 愛新覺羅溥儀（楷書七言対聯）
（東京国立博物館蔵 Image:TNM Image Archives）



企画展示期間 10月2日(金)～11月29日(日)

会場：新館特別展示室

「ラストエンペラー」愛新覺羅溥儀が生きた清朝後期は、歴史的には不安定な情勢が続いていた反面、中国文化の精華ともいえる書画作品はむしろ活発に制作され、多くの華麗な作品が遺されています。

東京国立博物館、早稲田大学津八郎記念博物館からの借用資料を含め、皇帝や皇族、政治の世界や民間で活躍した人物などの書画作品を展示します。

列品解説：期間中の土曜日 午後1時～2時
（10月10日・17日・24日、11月7日・21日・28日）

← 吳昌碩「富貴長寿図」（民国元年・1912年）
近代中国の大家・吳昌碩（1844～1927）の大作。
富貴を象徴する牡丹と、長寿を象徴する松を描く。



関連イベント

新館オープン記念コンサート

10月18日(日)
午後1時30分～3時30分
演奏：シャングリラ
（中国楽器アンサンブル）



習字の日記念講演

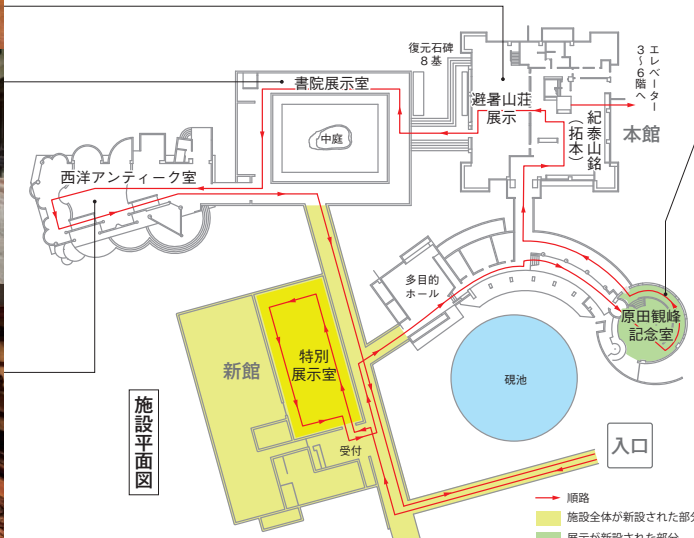
「池部政次コレクションについて」

11月1日(日) 午後1時30分～3時
講師：金 志虎 氏
（早稲田大学津八郎記念博物館助手）

《新設展示》

原田観峰記念室

新館オープンを機に、日本習字創立者・原田観峰の書を、未公開作品を中心に展示します。



「生命の徴」——滋賀と「アール・ブリュット」について

滋賀県立近代美術館学芸員 渡辺亜由美

滋賀県の福祉施設では、戦後間もない1948年から粘土による造形活動が行われていました。その活動は、障害のある子どもたちの教育的な営みとして、かつ職業訓練の場として、1946年に設立された近江学園（現：滋賀県立近江学園）でいち早く始まりました。粘土による製品づくりを推進する取り組みは、その後信楽寮（現：滋賀県立信楽学園）で生産された「汽車土瓶」（図1）へとつながっていきます。月に2万個の注文を得ていた汽車土瓶の大ヒットは、自分たちの仕事が多様な人の役に立っているということを強く実感できる取り組みでもあったのです。

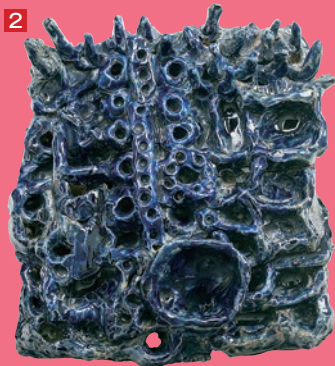
こうした製品づくりとともに、知的障害児たちの手による豊かな表現を守り・育む中でひろがった自由な造形活動も、滋賀の福祉施設の大きな財産です。粘土や絵画などの創造性溢れる活動は、自発的な成長を信じ、一方的な指導を行わないという温かな眼差しの中で行われてきました。そして、90年代以降、福祉施設で生まれた作品の一部がローザンヌのアール・ブリュットコレクション

ンなどの国外の美術館でも紹介されるまでとなり、今日大きな注目を集めています。その中では、荒々しさと繊細さが共存する伊藤喜彦さんの「鬼の顔」（図2）、無数のトゲで覆われ愛嬌のある顔のついた澤田真一さんの作品（図3）などの粘土造形の他、ブルーの色が織り成す萩野トヨさんの刺繍作品（図4）など、滋賀の歴史ある土壌から誕生した豊かな作品たちも多数紹介されました。こうした独特の歴史を持つ滋賀県の福祉施設の造形活動の取り組みを中心にご覧いただける展覧会が、滋賀県立近代美術館で10月3日（土）から始まる「生命の徴——滋賀と「アール・ブリュット」展」です（10ページ参照）。本展ではその先進的な取り組みがどのように継承され、展開してきたのかを県外や国外の作品も含めた約150点の作品を通じてご覧いただきます。

表現という可能性を知り、それによって広がった作り手たちの世界——。本展が、彼らの生命の徴である数々の作品とその魅力に出会う、すばらしい機会となれば幸いです。



1



2



3



4

雨森芳洲と朝鮮通信使 ～未来を照らす交流の遺産～

開催中～ 10月18日(日)
長浜市長浜城歴史博物館

開催中～ 10月25日(日)
高月観音の里歴史民俗資料館



重文「李東郭七律 附雨森芳洲識語」(芳洲会蔵)

国交正常化50周年の今年、日本と韓国の共同提案の形で、長浜市にある重要文化財「雨森芳洲関係資料」(芳洲会蔵)を核とする朝鮮通信使に関する記録をユネスコ記憶遺産に登録申請しようとする取り組みが進められています。

本企画展とシンポジウムでは、朝鮮通信使の概要や歴史的意義を再確認し、芳洲の思想や果たした役割、思想家や国際関係史の中での芳洲の実績を明らかにします。

〈長浜会場〉入館料: 大人400円、小中学生200円

休館日: 期間中無休

〈高月会場〉入館料: 大人300円、小中学生150円

休館日: 月・火曜日、祝日の翌日
(ただし10月12日は開館)

■記念シンポジウム

10月17日(土) 午後1時30分～4時30分

会場: 長浜文化芸術会館ホール

料金: 入場無料(参加申込不要)

第1部 基調講演「雨森芳洲と朝鮮通信使」

講師: 仲尾宏氏(京都造形芸術大学客員教授)

第2部「唐人踊り(三重県津市分都町)」公演

第3部「雨森芳洲子どもミュージカル」映像紹介

出演: 長浜市立富永小学校児童

第4部 パネルディスカッション

パネリスト

八杉 淳氏(草津宿街道交流館長)

山口華代氏(長崎県立対馬歴史民俗資料館主任学芸員)

姜 南周氏(朝鮮通信使ユネスコ記憶遺産韓国学術委員会委員長・前釜山文化財団理事長)

佐々木悦也学芸員(高月観音の里歴史民俗資料館)

仲尾 宏氏(基調講演講師)

コーディネーター

太田浩司学芸員(長浜市長浜城歴史博物館長)

お問い合わせ先: TEL 0749 (85) 2273 〈高月会場〉

竹工芸の技と美

— 杉田静山作品展 —

10月3日(土)～11月23日(月)祝

野洲市歴史民俗博物館(銅鐸博物館)



花籠「海の調べ」

野洲市在住の杉田静山氏は、日本を代表する竹工芸作家で、滋賀県無形文化財保持者です。本展では、同氏の繊細な編組による独自の技と、その作品の美の世界を鑑賞いただきます。

休館日: 月曜日(10月12日、11月23日は開館)・

10月13日(火)、11月4日(水)

入館料: 大人200円、高大学生150円、

小中学生100円

※「関西文化の日」11月14日(土)・15日(日)は、すべての入館者様無料

お問い合わせ先: TEL 077 (587) 4410

いのち 生きる 生命の徴

— 滋賀と「アール・ブリュット」 —

10月3日(土)～11月23日(月)祝

滋賀県立近代美術館

「アール・ブリュット〈生(き)の芸術〉」

は、人間の生の根源にねざす創造の衝動から生まれてきた芸術を意味しています。日本で独自の展開をしている「アール・ブ

リュット」のひとつである、障害のある人々の造形に目を向けてみると、滋賀県で行われてきた、先進的な造形活動の取り組みが浮かびあがります。

本展はユニークな造形活動の歴史を概観しながら、その取り組みがどのように継承され、展開してきたのかを参照作品を含めて展覧します。

休館日: 月曜日。ただし10月12日(月)祝および11月23日(月)祝は開館、10月13日(火)が休館

入館料: 一般1000円、高大生650円、小中生450円

■講演会「右腕を失ってアール・ブリュットと三橋節子」

10月17日(土) 午後2時30分～4時

講師: 榎木野衣氏(美術批評家、多摩美術大学美術学部教授)

会場: 当館講堂

■トークイベント「滋賀の造形を語る」

11月1日(日) 午後2時～

〔講演〕講師: 吉永太市氏(元一麦寮寮長)

〔座談会〕

講師: 谷村太氏(元滋賀県立近江学園支援員)

山下完和氏(やまなみ工房施設長)

聞き手: 服部正氏(甲南大学文学部准教授)

会場: 当館講堂

お問い合わせ先: TEL 077 (543) 2111

没後400年 古田織部展

10月10日(土)～11月23日(月)祝

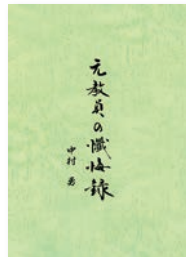
佐川美術館



《黒織部茶碗》美濃 桃山時代(17世紀初期)

大胆奇抜な造形性や斬新なデザインを創出した桃山時代の武将茶人・古田織部の没後400年を記念して、ゆかりの茶道具や南蛮胴具足などの文化財を紹介し、織部の人物像とその創意に迫ります。

休館日: 月曜日(祝日の場合は翌火曜日)



元教員の懺悔録

中村 勇 著

B5判並製本 総160頁 非売品

問合先 野州市三上574 (著者)

戦後まもなく教職に就き、平成に改元の年、野洲小学校長を最後に退職した著者が、暗中模索の日々を回顧。校長時代の終了式などにおける講話の原稿も収録。(2015. 7. 1刊)

著作品集&スケッチ画 有千里馬

長谷川由蔵 著

A 5判並製本 総262頁 非売品

問合先 近江八幡市安土町上豊浦1415 (著者)

安土町在住で草津市立水生植物公園みずの森元園長の著者が、地元の歴史や風俗、鳥追いやウナギ釣りといった少年期の思い出、風景スケッチなどをまとめた。(2015. 7.30 刊)



中小企業が生きる道

森 建司 著

B6変形並製本 総149頁 900円+税

「もったいない」「おかげさま」「ほどほどに」をキーワードに、持続可能な社会を実現するために取るべき道を説き、大企業には出られない、中小企業ならではの経営理念を示す。(2015. 8.10刊)

書店で
発売中

設立20周年記念誌 塩津浜かいわい

塩津浜歴史研究会 編

B5判並製本 総90頁 非売品

問合先 長浜市西浅井町塩津浜949 中嶋守治(会長)

塩津浜住民が結成した会の20周年を記念し、塩津城主や神社、街道の由緒、坂本龍馬が泊まったかもしれない宿、合気道の開祖との関わりなど、会員6名の論稿を収録。(2015. 9.28刊)



募 集

第19回 日本自費出版 文化賞

募集期間

2015年11月1日～
2016年3月31日

応募資格

制作費用の全額または一部を著者(個人・団体)が負担し、日本国内で2005年以降に出版され、主として日本語で書かれた一般書で、製本された著書が対象。

募集部門

- ①地域文化部門
- ②個人誌部門
- ③小説部門
- ④エッセー部門
- ⑤詩歌部門
- ⑥研究・評論部門
- ⑦グラフィック部門

応募方法

応募用紙に必要事項を明記のうえ、応募著書を1冊添えて文化賞事務局(下記)までお送りください。
応募手数料: 2000 円

申し込み・お問い合わせ先

〒103-0001
東京都中央区日本橋小伝馬町7-16
ニッケイビル7F (社)日本グラフィックサービス工業会内
NPO法人日本自費出版ネットワーク
日本自費出版文化賞事務局
TEL 03 (5623) 5411

発 表

2016年9月上旬

賞金・賞品

大賞: 賞状/賞金20万円
部門賞: 賞状/賞金5万円
特別賞: 賞状/記念品
入選: 賞状

入館料: 一般1000円、高大生600円、中学生以下は無料

お問い合わせ先: TEL 077 (585) 7800

第22回全国山城サミット 米原大会

京極氏遺跡と鎌刃城跡の国史跡指定10周年を記念して開催される今サミットでは、地域住民が山城を活用している事例を発信し、現地や会場でふれあいと交流の場を設け、記念講演とシンポジウムにより、山城活用の意義を再認識し、可能性を探ります。



京極氏遺跡 (上平寺城跡)

1日目-山城跡を活かしたまちづくり 現地見学交流会

10月24日(土) 正午～午後4時30分

集合場所: JR米原駅東口(午前11時30分)、
もしくは米原市番場・上平寺(午前11時45分)

見学先: 2コースのうちどちらかを選択

A…国史跡鎌刃城跡(米原市番場)

B…国史跡京極氏遺跡(米原市上平寺)

参加費: 1000円(おにぎり代等)

定員: 各コース100人 [申込要]

2日目-第22回全国山城サミット米原大会

10月25日(日) 午前11時～午後4時

会場: 滋賀県立文化産業交流会館

(米原市下多良二丁目137)

参加費: 500円(資料代) [申込不要]

■記念講演「城跡活用のこれから」

講師: 中井均氏(滋賀県立大学教授)

■講演「城と名物」

講師: 萩原さちこ氏(城郭ライター)

■シンポジウム「地域とともに! 山城を舞台に!」

事例報告&パネルディスカッション

お問い合わせ・申し込み先: TEL 0749 (55) 4552
(米原市教育委員会)



雨森芳洲と朝鮮通信使

未来を照らす交流の遺産

長浜市長浜城歴史博物館・
高月観音の里歴史民俗資料館 編
B5変形並製本 総136頁 1800円＋税

日韓共同提案の形で、ユネスコ記憶遺産への登録申請が進められている朝鮮通信使に関する記録の核となる「雨森芳洲関係資料」を中心に、絵画、記録文書、遺品などを収録。

淡海文庫54

佐々木京極氏と近江清瀧寺

西村清雄 著

B6判並製本 総160頁 1200円＋税

佐々木京極氏の菩提寺、清瀧寺（米原市）には、初代氏信から25代高中までの墓碑が並ぶ。婆娑羅大名・道誉や、家康に仕えた高次など京極氏累代の武将の生きざまを紹介。



10月
下旬
発売



近江旅の本

信長が見た近江

信長公記を歩く

大沼芳幸 著

A5判並製本 総136頁 2000円＋税

織田信長はなぜ近江に本拠を置いたのか。天下布武の足がかりをつかみ、それを具現化させた近江の地の城跡や古戦場、神社仏閣などを、『信長公記』の記述に沿ってオールカラーで紹介。

10月
下旬
発売

自費出版年鑑2015

企画／NPO 法人日本自費出版ネットワーク

A5判並製本 総188頁 2000円＋税

第18回日本自費出版文化賞受賞作を紹介し、応募された全書名、全著者名などを掲載。大賞受賞者インタビュー、総評の他、巻末に日本自費出版ネットワーク会員一覧、第19回日本自費出版文化賞の募集要項を付す。



10月
中旬
発売

表紙写真 観峰館新館

本館・書院展示室・西洋アンティーク室など、複数の建物をめぐる構造になっている観峰館全体の新たな入口でもある。

編集後記 滋賀県は「明治の三筆」のうちの2人、日下部鳴鶴（彦根市）と巖谷一六（甲賀市）を生んだ地であり、観峰館は彼らの書も所蔵しています。彼らと親交をもち、その書に影響を与えたのが、明治初期、駐日清国公使の随員として来日した楊守敬。書の歴史は日中交流の歴史でもあります。㊦



滋賀県立大学環境ブックレット

博士たちのエコライス

いのちはぐくむ農法で米作り！

小池恒男 著

A5判並製本 総88頁 800円＋税

県立大学近くの田んぼで、始まった農業や化学肥料を使わない米作り。学生たちも田植えや草刈り、収穫などにチャレンジ！ 食味コンクール金賞を受賞するなど、8年間の奮闘の記録。

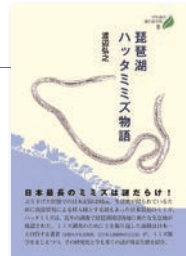
びわ湖の森の生き物5

琵琶湖ハッタミズ物語

渡辺弘之 著

四六判並製本 総160頁 1600円＋税

生息地が限られているために移入種とする説もあつた日本最長のミズ、ハッタミズは、近年の調査で琵琶湖周辺に新たな生息地が確認された。今も多くの謎が残る生態を紹介。



多賀町埋蔵文化財発掘調査報告書 21

大谷遺跡

多賀町教育委員会 編

A4判並製本 総93頁 3000円＋税

平成25年、多賀町富之尾の道路工事現場で発見された遺構は、木炭墓と見られるものが11基、内4基には鉄板が付帯されており、平安時代後期の墳墓群の一部だった。

健康に生きるための保健体育

谷川尚己・守谷まさ子・江藤和子 著

A5判並製本 総135頁 1000円＋税

なぜ葉はぬるま湯で飲む？ ガンにならないためには？ 危険ドラッグって何？ 子どもの運動や中高年の生涯スポーツについてなど、健康に生きるためのすべてを網羅した、全世代向けの「保健体育」テキスト。



Duetの定期購読をご希望の方は、下記までお申し込みください。

〒522-0004 滋賀県彦根市鳥居本町655-1

サンライズ出版株式会社 Duet 編集部

TEL (0749) 22-0627 FAX (0749) 23-7720
(振替) 01080-9-61946

インターネットでDuetがお楽しみいただけます。

<http://www.sunrise-pub.co.jp/>

お申込先